
一人二役の魔法技師

カラシニコフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人二役の魔法技師

【NZコード】

N7390Y

【作者名】

カラシーロフ

【あらすじ】

魔法と科学が混在する世界で自ら犯した罪を自ら背負いながら聞きていく。

一人の天才魔法技師のお話。

「」との成り立ち

魔法と科学が当たり前のように共存するようになつてまだ日は新しい。

魔法と科学が共存するために世界は実に三度もの世界大戦が必要だつた。第一次、第二次、第三次、の統合戦争を経てようやく人類は流した血の重さに気付き両者の完全統合という和平をもつて使者への鎮魂とした。

しかし、表面上での戦いは終了したものの未だに世界各地で双方の過激派残党たちが散発的なテロ活動を続けていた。そこで統合政府はそれらの鎮圧、テロの抑止のため双方の権力から完全に逸脱した政府直轄の独立部隊の結成を決定。

それらの人員養成を開始、統合戦争でも完全中立を保つていた日本に養成学校を設立、世界中から人員を募つたのであった。

馬鹿が一人で悪巧み

「なんでお前が59位で俺が60位なんだよ」

「ん、普通に実力差だろバークと言いたいとこだけど最下位とその手前を争ってる時点で普通に悲しいのは俺だけか?」

養成校の定期テスト1回目は五月中旬にある、そしてテスト返却はその三日後だ。地球温暖化の影響でそろそろ春が終わるよという時期に屋上でバカ一人が騒いでいた。

もちろんその内容はつい十五分ほど前に返却された中間テストの結果によるものである。クラス順位60位までのうち59位と60位がそこにはいた。ちなみに校内順位は2567人中2567位と2566位であるまさに「ぶつちぎり」だ。

「で、どうするよ俺一このままじゃ成績不振でこの学校から追い出されちまうぞ」

「綾斗よ、その可能性を今必死で頭の中から削除しようとしてんのになぜ蒸し返す?やっぱりお前はアホなのか?アホなんだな!」

「まずは、落ち着け。現実逃避しても何も変わらんぞ。その2に俺はアホだがお前に言われたくはない。テストの成績だつて1点しかかわらねえ」

「その1点が勝負を決めることもある!」

「それは、ボーダーラインにいる人間のことだろ?が、俺たちはその線かかってもいねえ」

そこまで言い争つたときお互いの議論の不毛さに気付き二人ともため息をつく。そして同時にこう切り出した。

「「で、結論かいあるっ。」」

つまるところそつなのだ。定期テストの成績が悪くてこのままじゃ退学になる、補習という手もあるがそんなことで挽回できる点数ではない。だがそこまで考えたところで俺は一つの答案を思いついた。といつよりかなり絶望的だがこれしかない案をどうやら綾斗も同じ考え方に行き着いたらしい。

「ヤリ」とこの形容が似合いそつな笑みを浮かべ綾斗はこいつ呟いた。

「校長の正体を暴く！ それしかねえ」

校長の決意

「やっぱりそれしかないか？」

「ああ、これしかない」

そういうて綾斗は立ち上がり、屋上の出口に向かう。

「どこに行く？」

「決まっている。普通校長に会つには校長室だ。じゃあ先行つて
るからな」

一人だけ残された屋上で竜一はあの奇想天外な校長の今となつては、
伝説的な演説を思い出していた。

四月七日。残念ながら桜は散つてしまつたがすべては自分の思惑道
理である。

第三次統合戦争を受けて科学サイドからも魔術サイドからも離れた。
統合政府直轄の特殊部隊設立のめどはたつた。

残念ながら既存部隊からの人員引き抜きが許可されなかつたため人
材の育成を初めから行う羽目になつたがそれも誤差の修正範囲であ
らう。

自分の「ネクション」を使い世界中から将来有望な若者を半ば強制的
にかき集めた。

すべては第四次統合戦争防ぐためである。そつしづらくないうち
に現行の統合政府は骨抜きにされ再び戦争がおこることなどはこの
僕には、よくわかつっていた。だから統合政府を揺さぶりせめて、独
自で抑止力となる戦力を確保する必要があつた。

だからこうして僕はは校長になつた。すべては来たるべき戦乱を避

けるためあの愚かな戦いを再び起しきるのみならぬ。

さあ、そろそろ行かねば将来有望な若者たちが待ってる。

そして私は教壇に立ち彼らに俗にいう校長先生のお話を開始した。

校長の演説

かなり広い講堂の中で約2600人の生徒が静まり返る中壇上に立つ一人の男がしゃべり始めた。

「君たちにとつてはじめてつてばいいのいかな?」

うん、初めまして僕がこの学校の設立者で校長で出資者です。ほかにも日本魔法科学混合技術開発研究所の局長とかやらせてもらつてます。

名前は今は、そうですね今はまだ伏せておきましょ。

なお僕に関する情報プロテクトは完璧なので調べても何もできませんよ。

もちろん、この姿もイリュージョンとかその他もろもろの魔法によつて身長、体重、声、雰囲気すべて変えてます。

まあそんなことは置いておいてみなさん「入学おめでとつ」や「ま

す。この学校に入学した皆さんがこれから世界をいすれ動かしていく

のは間違いないと思います。

そんな人材を集めましたから。

奇人、変人、馬鹿、鬼才、天才。一般的観点から見れば螺子が1本2本どころか5本6本抜けているようなそんな奴らばかりです。君たちが入学したこの学校もいづれは必ず歴史に残るようなものとなるでしょ。では、これからこの学校の校則を発表します。

聞いてください。

1つ、この学校には先生がいないので後で私が発表する生徒に先生を受け持つてもらいます。断ると退学です、なお成績についてもその生徒に一任します。ちなみにこの学校に留年制度はありませんWと退学です。

1つ、この学校の最大権力組織は生徒会とします。生徒会には教師

の否認権があります。

まあ、こんなところでしょうか。後は生徒手帳見てください。
最後に校長から生徒全員共通の宿題を出します。

実のことを言うと私は皆さんと同じ17歳なんです。
つまり、これから三年間皆さんと一緒に学び舎を同じくさせていただきます。

だから生徒皆さんに3年間で僕の正体を見破つてもらいます。
僕のことを見つけた時点での学校の卒業資格を「与えるもの」とします。

それでは皆さん頑張つてください。

おっと忘れてました当校の入学試験を主席入学された。
1年12組の柴崎葵さんには今から一時間後までなら僕に直接対決する権利を与えますがどうしますか?」

約2600人の人間が静かに息を潜める中一人の女子生徒が静かに
檀上の校長に対して啖呵を切った。

「1Jの柴崎葵。謹んでその勝負を受けさせていただきます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7390y/>

一人二役の魔法技師

2011年11月27日23時12分発行